教育・研究報告

関西大学外国語教育における ICT の活用
～授業・Study Abroad Program・自学自習に向けて～

吉　田　信　介*

1．はじめに

現在、ICT は産業、行政、社会の基幹システムとして、あらゆる社会活動、産業活動を支えるインフラとなっている。これは大学を含む高等教育研究機関においても同様であり、そこでは ICT の活用による教育研究、大学運営の改善が大きな課題となっている。その中でも特に重要な課題として、高校生の 5 割を超える進学率に伴う多様化した入学生への教育の質の保証があげられる。そのニーズに応えるため、通常の授業に加えて、ICT を積極的に活用した教育体制の整備が求められている。

関西大学の外国語教育においても、現在様々な形態の ICT を活用した授業が情報演習室、および CALL（LL）教室で展開されており、それには、1）正規英語科目の「クリックして読むコース」、2）正規科目の「Study Abroad プログラム（各留学先）」での CEAS の活用、3）全学での e-Learning システムの活用、4）CALL システムを活用した授業、がある。ここでは、これらの授業の概要、利点、問題点について検討し、今後の関西大学における ICT を活用した外国語教育について考察する。

2．「クリックして読むコース」

この授業は、文字通りインターネット上の情報をクリックしながら、より速く、より正確に読むことを目的とする。題材は、基本的には学生が各自で選択し、そこでは情報収集のための読解能力養成が目指される。全体の構成は、1) Reading Strategies and Skills (Previewing, Predicting, Scanning, Skimming, Inferring, 新聞の読み方)、2）ウエブ・リスニング練習法、3）Topic of the Week、4）クリック英語サイト学習からなり、ICT を活用した授業が展開されている。

到達目標は、1）読む物、読む目的により、読み方が異なることを認識する。2）読み方の方法（リーディング方略）を学ぶ。3）インターネット上の豊富な情報から、自分に必要な

＊　外国語学部　教授

題材を素早く検索できる。4）インターネット上の豊富な情報を、速く正確に読むことができる。5）インターネット上の英語学習用のサイトを利用し、英語力向上をはかる、ことである。具体的なトピックとしては、次のものがあり、これらについて、各自が課題に基づく検索・収集・まとめ・発表・評価を行う。

1．英語のゲームに挑戦
2．リスニングを試そう
3．洋画の台詞
4．英語のニュース検索
5．英語力を試そう
6．歴史上の人物や有名人
7．アメリカへの留学
8．今週の運勢
9．大阪の紹介
10. 天気・天候の調査
11. 世論調査
12. 海外旅行
13. 日本と世界の比較
14. 日本の食べ物
15. 薬物
16. ことわざ
17. 海外ボランティア活動
18. 飲酒運転の危険性
19. いじめ問題
20. Walt Disney
21. 海外のアニメ番組
22. 対訳付き絵本の作成
23. 世界遺産
24. クリスマスプレゼント

○　筆者による Topic of the Week「海外旅行」の授業例　http://www.fodors.com/

このサイトから①自分の行きたい都市名、②そこの観光スポット名称（SIGHTS & ACTIVITIES）と、説明の英語を数行貼り付け、日本語で要約（２～３行）、観光スポットは Sights をクリックして選ぶ。③泊まりたいホテル名、④行きたいレストラン名を検索させる。その際都市の地図をコピー・ペーストする。⑤ Why would you like to go to that country or city? Write in English. ②の説明以外は英語で書くこと。ここでは、世界各国の観光都市情報（英語のサイト）から自分の好みに応じた場所を探し、訪問・滞在時に必要な宿泊・食事情報を文字・画像・データで入手するシミュレーション学習を行い、それらを英語で発表し、ピア評価する。

これらに加えて、オンライン辞書、コーパス、英和・和英・英英辞書、英作文サイト、メディアサイト、海外放送、新聞・雑誌、趣味、美術・博物館、映画、人物、料理、旅行、クイズ番組サイトにも常時アクセスして、各自に必要な情報を検索・収集・ポートフォリオ化させている。

このように、この授業においては、読みの基本を習得した後、統一テーマをもとにインターネット上の情報を各自が独自に検索・収集・まとめ・ピアチェック・プレゼン・評価の授業サイクルを行うことで、英語による検索力・発信力・評価力を養成している。その結果、通常教室では習得できない総合的な英語情報処理能力の習得が可能である。

しかしながら、教室のレイアウトがスクール方式のため、グループワークの実施が困難であるため、今後、島型方式を取り入れ、教師も自由に巡視できるように配慮する必要がある。

３．「Study Abroad プログラム（各留学先）」（CEAS を活用したレポート提出）

１年次に養成した外国語の基礎運用力を前提に、２年次には原則としてすべての学部生が海外の提携大学に１年間留学する。その期間中、現地から隔週・月一回で CEAS にレポートを提出させている（図１参照）。具体的な報告内容は次のとおりである：

① 学習について（一か月に一回、日本語で200字以上）英語力、宿題、自発的学習、科目の知識等について、この一か月間を振り返ってどのように対応・工夫・向上したかを具体的に報告する。向上しなかった場合、原因・対策について報告する。

② 授業について（２週間に１回、日本語で100字以上）内容、方法、出席、教師、ディスカッション、クラスメート等について、この２週間を振り返ってどのように対応・工夫・向上したかを報告。向上しなかった場合、原因・対策について報告。

③ 生活に関する報告（２週間に１回日本語で100字以上）学校、寮・ホームステイ、人的交流、週末、休暇中、その他についての報告。

④ 状況報告（２週間に１回、日本語で200字以上）今、思っていること、考えていることについての報告。

以下、具体的な記述内容を列挙する（複数の留学生の記述を筆者が書き換えた）：

１）アカデミック・ライティングは難しいが、事前調査が必要なのでとても勉強になる。

２）好きな先生の発音のマネをしながら音読して英語の宿題をしている。

図１：CEAS のレポート提出画面

3）授業中、現地学生に比べて日本人学生は聞き手になるため、なるべく積極的に発言するようにしている。

4）日本の大学との違いは、レクチャー中に寝ている学生が皆無であり、講義時間に対して課題の量が非常に多い。

5）ライティングでは毎回 summary や detailed paragraphs を書く宿題が出され、客観的な目線で文章を書く力が要求される。また、提出前に友人のネイティブ・チェックを受け推敲している。

6）ルームメイトとの日常の雑談で自然な会話力を身につけることができた。

7）何度も presentation に取り組むうちに人前で話す度胸や聞き手に気を配るといった事が自然と身に付いた。

8）授業の課題で、教員になる際の具体的なキャリアプランを考案して発表した。その際、日本の教育現場について説明してからポスターにまとめてプレゼンしたところ、質問や感想があり手ごたえを感じられた。

9）休暇中 homestay program に参加し、留学で培ったスピーキング力を使ってリラックスして意見を述べている自分に満足した。

このように、留学中の重要な目標である英語力の向上、学業面での工夫と成果、滞在国についての理解、生活上の工夫等についてレポートを作成・提出をさせることで、各学生の留学目的の常時確認と、自己成長を記録するでき、将来のキャリア形成にも役立てることができる。また、学部としても留学中の学生の生活状況を把握することができる。

一方、現時点では、各自の留学における成長を記録するのが目的のため、こちらから積極的なフィードバックをしておらず、ともすればモーティベーションが下がり、マンネリ化している書き込みも散見されるため、今後、なんらかのフィードバックを行うことを考慮中である。

4．e-Learning による自学自習型学習

関西大学では、2011年度よりオンライン e-Learning 教材「総合英語プラクティカル・イングリッシュコース（㈱リアル・イングリッシュ・ブロードバンド）」を導入し、学内外を問わず全ての関大生が利用することができ、現在、3,000名以上が利用している。

（ア）特徴

本教材は、全300レッスンからなり、個々の受講者のレベルに合わせてカリキュラムが組まれるようになっている。マルチメディアを活用したコンテンツを楽しみながら取り組め、双方向型のアクティビティなどを取り入れている（図２参照）。

（イ）内容

受講者の分野別英語力を測定する診断テストで、各自の能力に合わせたレベルを選択し、

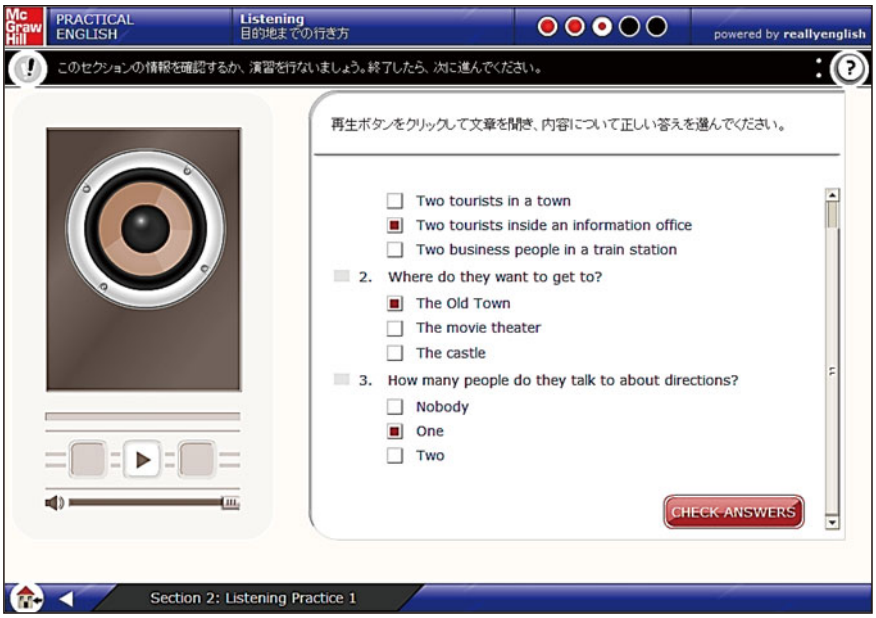

図 2 ：リスニングの学習画面

	累計
ログイン回数	27
学習レッスン数	50
学習レッスン数(復習含む)	74
No. of lessons passed (in order to reach course completion)	50
修了ラーニングパス数	5
レッスンテスト平均スコア (%)	74
文法レッスンテスト平均スコア (%)	75
リーディングレッスンテスト平均スコア (%)	74
リスニングレッスンテスト平均スコア (%)	74
最終ログイン日	2011-09-19

テスト	日付	得点 (%)
Diagnostic - Grammar	2011/08/06	84%
Diagnostic - Listening	2011/08/06	54%
Diagnostic - Reading	2011/08/06	74%

レッスン名	レッスンタイプ	レッスン ID	レベル	日付	エクササイズ数	エクササイズ平均スコア	レッスンテスト	レッスン修了
A Japanese writer living in the U.K. 英国で活躍する日本人小説家	Grammar	26017	4: GENERAL Intermediate	2011/08/19	4 / 4	87%	85%	Yes
A bad experience at a restaurant レストランへの苦情	Grammar	16004	4: GENERAL Intermediate	2011/08/15	4 / 4	72%	80%	Yes
A new start 新生活の始まり	Grammar	25482	4: GENERAL Intermediate	2011/09/19	6 / 6	66%	20%	No
A new start 新生活の始まり	Grammar	25482	4: GENERAL Intermediate	2011/09/19	0 / 4	-	80%	Yes

図 3 ：個人別学習記録

日常やビジネスで実際に使われる“リアル”な英語を題材とした文法、リスニング、リーディングからなる 1 レッスンを約 1 時間で学習する。全レッスン修了するのに約300時間を要する。その際、詳細な学習履歴が担当者に提供され、個別指導が可能である（図 3 参照）。

（ウ）学習の流れ

1 ）自己診断テストで分野別英語力を分析

2 ）テスト結果に基づき、最初の10レッスンをシステムが自動選択

3 ）学習成績に応じて、次の10レッスンをシステムが選択。

4 ）修了基準（設定可能）を達成するまでシステムが10レッスン毎に問題作成

５）修了証を発行（50レッスン毎）

（エ）対象レベル

TOEIC テスト300～750点程度

（オ）トピック

○　文法（70レッスン）: 前置詞・動詞と時制・名詞句・形容詞・副詞・接続詞・疑問文

○　リスニング（115レッスン）・リーディング（115レッスン）: ビジネス、余暇と娯楽、旅行と交通、日常生活、社交と対人関係、社会と政治、自然と環境など

（カ）具体的なレッスン・トピック

○　ビジネス：オンラインショッピング、交渉に臨む、国際貿易、電話での問いあわせ

○　余暇と娯楽：電話の音声案内、仕事とプライベートのバランス、SSN

○　旅行と交通：空港でのアナウンス、入国審査、銀行の窓口で、レストランでの注文

○　日常生活：ショッピング、賃貸物件、病状を伝える表現、服装とファッション

○　社交と対人関係：家族関係、近所づきあい、苦情申し立て、人脈作り

○　社会と政治：大学教育、新たな文化への適応、悩みの相談、ホストファミリーとの生活について

○　自然と環境：公害と環境問題、天災、人間と自然、遺伝子工学は人類を救うか

このように、学習者のレベルに合わせた問題選定を行い、マルチメディアを活用したコンテンツを楽しみながら取り組み、双方向型のアクティビティを行うよう工夫され、しかも日常やビジネスで実際に使われる“リアル”な英語を題材にした教材にもかかわらず、自学自習での利用者数がそれほど高くならないのが現状である。

そこで、対策として有効なのが、１）学生への自学自習利用への告知の徹底、２）いつでもどこでも学習できる環境の提供（学内無線 LAN の完備）、３）授業との連動性をもった e-Learning の展開（ブレンディッド・ラーニング）である。これらに加えて、入学前教育やキャリアセンターとの連携による、入り口と出口での付加価値をつけることで、これまで以上に外国語の運用力の質の保障を行っていくことが重要である。

５．CALL（Computer Assisted Language Learning）システムを活用した授業

現在、岩崎記念館に設置されている CALL 教室には PC@LL（㈱内田洋行）が導入され、リスニング、同時通訳演習、通常の外国語（英語含む）の授業において活用されている。

CALL 授業では、コンピュータを導入することで文字、音声、静止画、動画といった複数のメディアを統合的に扱え、高度なマルチメディア語学学習環境が実現する。その特徴として、１）マルチメディア性：文字・音声・映像情報がすべてデジタル化され、統合的にコントロールできること、２）デジタル化：デジタル教材であるため、ノンリニアでの編集（組み合わせや再生順序の変更可能）ができること、３）個別化：ノンリニアでの再生（見たい

シーンや音声を即座に繰り返し）ができ、自己ペースの学習ができること、４）インタラクティブ化：学生が教師の再生する音や映像を視聴するだけという受け身の学習ではなく、求めるものに応じて音や映像を再生し、教師と学生、学生同士が音声・文字でコミュニケーションすることで、学習に積極的に参加する姿勢を育成できること、があげられる。

（ア）機能

本 CALL システムには、次のような機能が備わっている：

○ Speaking 練習モード（リピーティング・ロールプレイ・シャドーイング）、練習モードパート変更、話速変換、ピッチ表示、繰り返し再生、同時再生、テキスト文非表示、送り・戻し、音声提出、シンクロ（対応ファイル形式：wma、wav、MP３）

○ Listening
AB リピート、ちょっと戻し（秒指定可能）、練習モード（AB リピート、ポーズ再生、書き取り文提出、シンクロ（対応ファイル形式：wma、wav、MP３）

○ Writing
文字チャット、音声貼付け、チャットグループ変更、ペアレッスンのペアを引き継いだグループ参加、ログの記録

○ Reading
表示文速度調整、表示単位変更、表示形式変更、確認問題、音声再生、内容要約、問題作成機能、スラッシュリーディング機能

○ ScreenLesson®
動画再生（WMV）、字幕表示、音声・文章回答、回答提出、アフレコ、シンクロ、動画ストリーミング配信

○ DrillStudy®
静止画表示、問題再生、解答提出、シンクロ、アセスメント連携機能

○ 音声評定
発音評定、苦手練習、口蓋図アニメーション表示、履歴管理

○ リズム学習
アセスメント、リズム練習、アセスメント履歴管理

○ 音声読上げ
英語 TTS（TextToSpeach）機能、男性声・女性声読上げ

（イ）シャドーイングとリピーティング

最近注目を浴びており、頻繁に用いられている学習法であり、PC@LL® にも取り入れられている。シャドーイングでは、聞き取った英語を少しタイミングをずらせて影のように発声する学習法で、リスニングの力が伸びると言われている。リピーティングでは、英文の間にポーズが入った音声（１文、１フレーズ）を聴き取り理解し、ポーズの間にそのまま繰り返す学習法で、スピーキングの力が伸びると言われている（図４、５参照）。

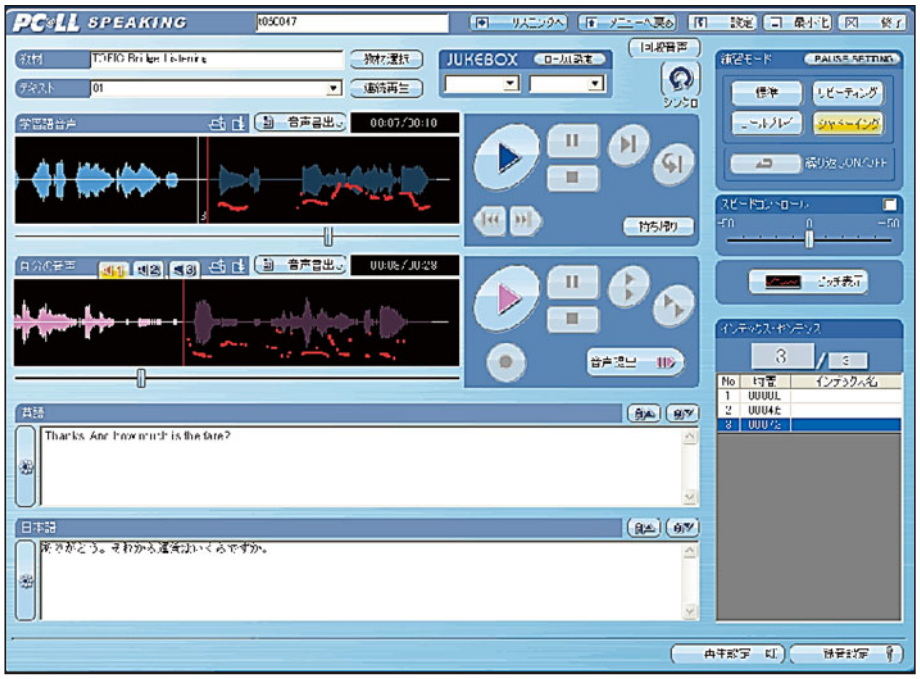

図４：PC@LL®：シャドーイング画面

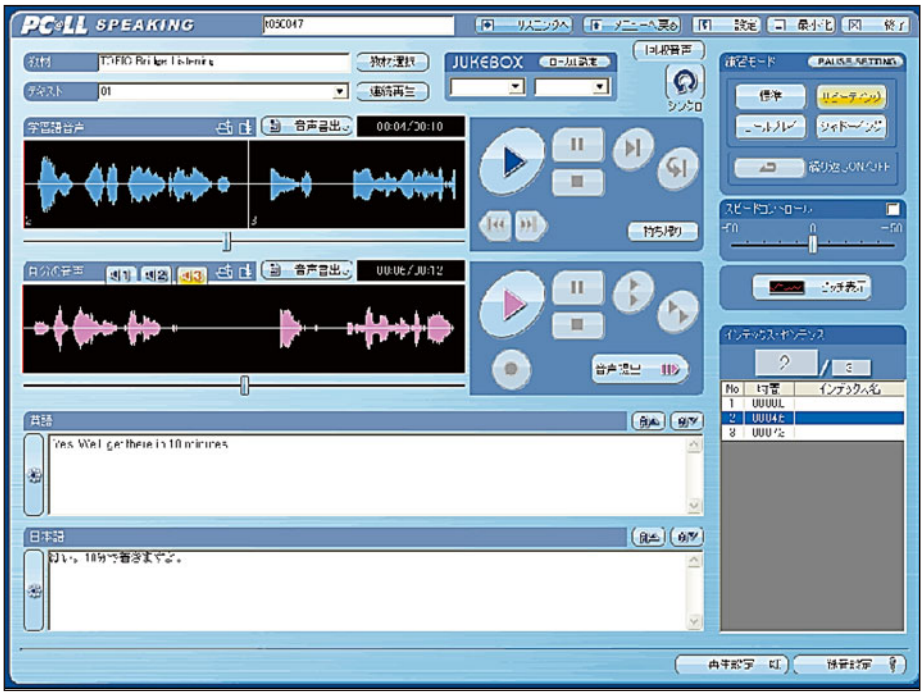

図５：PC@LL®：リピーティング画面

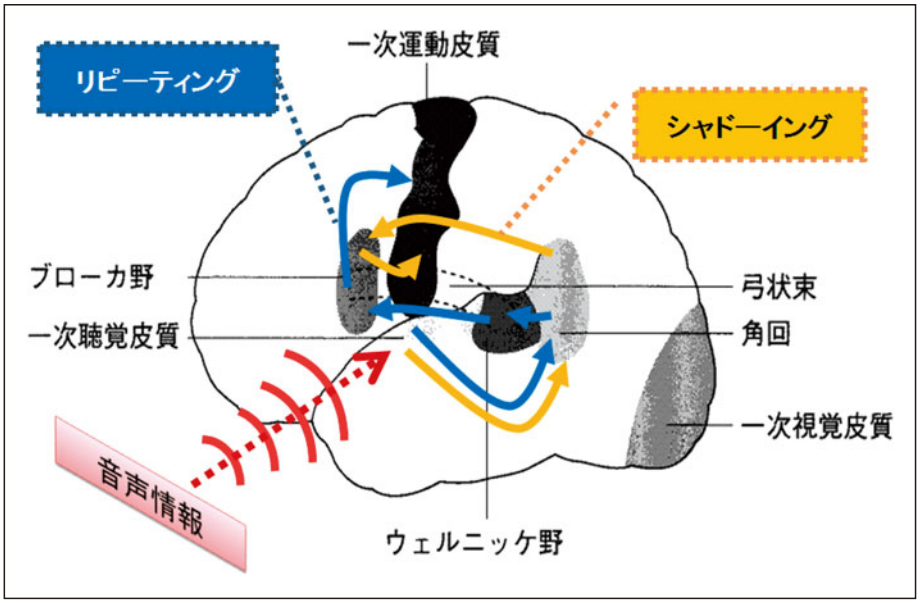

図 6 ：シャドーイング・リピーティング実施時の脳内メカニズム

言語処理の違いは、シャドーイング（on-line 処理）が、モデル音の即座の繰り返し（浅い処理）を行い、英語音声を音韻ループでの符号化を経て、発話再生をするのに対して、リピーティング（off-line 処理）では、ポーズの間に入力情報の保持（深い処理）を行い、英語音声を音韻ループで符号化を経て、長期記憶の心的辞書・統語知識へのアクセスの後、発話再生をするものである（図 6 参照）。

筆者グループが関大生に行った授業の効果の検証によると、１）英語の再生率では、リピーティングは伸び続けるが、シャドーイングは 4 回で天井効果となること、およびテキスト・方式が変わってもそれらは転移すること、２）再生語彙タイプでは、シャドーイングは音韻知覚力が向上するので、数字や固有名詞の聴解力向上に効果的であり（on-line 処理）、リピーティングは深い処理（構文・意味）を経て再生するので、内容把握力獲得に効果的（off-line 処理）であることが各々判明した（Shiki et al. 2010）。

一方、CALL による授業においても、教室のレイアウトがスクール方式で、グループワークの実施が困難であるため、島型方式を取り入れ、教師も自由に机間巡視でき、学生・教師間のインタラクションがスムーズに行えるように配慮する必要がある。

以上、関西大学での外国語教育における CEAS・Web の活用・e-Learning・CALL システムの活用法をみてきたが、これら以外にインフォメーション・システムでの授業支援システムでもコンテンツ作成が可能であり、多種多様の ICT 活用授業が実施されているのが現状である。将来的には、入学前教育も含めて、在学時の ICT 活用による外国語学習を「学生カルテ」に記録・統合させ、学生一人ひとりのキャリアデザインの支援へ繋げていくことも必要であろう。

6．おわりに

社会・経済・文化のグローバル化が進展し、国際的な競争がますます激しくなっていく中で、大学が社会の要請にこたえることのできる優れた人材を育成し、先端的・独創的な研究を進めることが我が国にとって極めて重要となっており、大学の教育研究水準の更なる向上、および国際的にも通用するような大学の質の保証が強く求められている（文部科学省，2002）。また、企業においても、「グローバルに活躍する日本人人材に求められる素質、知識・能力」として、「外国語によるコミュニケーション能力（語学力に加え、相手の意見を聴いた上で、自分の意見を論理的にわかり易く説明する能力）」、「海外との文化、価値観の差に興味・関心を持ち、柔軟に対応する」、「現地に受け入れられる気配りと人間性」が求められている（日本経済団体連合会、2011）。

そのような中、関西大学生へ大学がつける付加価値の一つとして、使える外国語（英語）力が大きな位置を占めることは言うまでもない。そのためには、入学前教育から、在学期間、留学中、さらには卒業後の生涯学習にいたるまで、デジタル・ネイティブである世代にとって親和性のあるICTを活用した教育実践を行っていくことが今後ますます必要となるであろう。

本研究の一部は、文部科学省科学研究費研究課題番号：21520610、および研究課題番号：21520609による助成を受けて行われたものである。

参考文献

文部科学省（2002）.「大学の質の保証に係る新たなシステムの構築について」Retrieved from［http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/020801.htm#1］

日本経済団体連合会（2011）.「産業界の求める人材像と大学教育への期待に関するアンケート」Retrieved from［http://www.keidanren.or.jp/japanese/policy/2011/005/index.html］

リアル・イングリッシュ・ブロードバンド．reallyenglish®
Retrieved from［http://www.reallyenglish.com/japan/］

Shiki, Osato. etal.（2010）. “Exploring Differences Between Shadowing and Repeating Practices : An Analysis of Reproduction Rate and Types of Reproduced Words”, *Annual Review of English Language Education in Japan 21, 81-90.*

ウチダ・スクール・ウェブ・ジャパン．PC@LL®
Retrieved from［http://school.uchida.co.jp/index.cfm/1,html］